

# 地域資源を活用した フットパスに関する研究

**寒** 地土木研究所 地域景観ユニットでは、少子高齢化で人口が減少する中、景観などの地域資源や社会資本空間を活用して、観光・地域振興及び健康増進などに貢献するフットパスに関する研究を行っています。

## フットパスとは？

イングランドで生まれた、自然や農村の景観などの地域の風景を楽しみながら歩くことができる“みち”のことです。イングランドでは、フットパスの経済効果や社会的効果が広く認知され、約24万kmが整備されています。



起源	1932年
法的根拠	1932年歩く権利法 1949年国立公園・田園アクセス法
整備延長	約24万キロメートル
経済効果	年間約8,000億円
管理者	土地の所有者、占用者および自治体

▲表 イギリスのフットパスの概要

▲イギリスのフットパス※

## 社会資本空間の現状

道内では、以下のように社会資本空間の利活用を前提とした整備がされていないため、フットパスなど地域の活動に貢献し切れていない状況です。

- 河川空間** 堤防上の天端は河川の管理用空間ですが、視界が開けフットパスとしても利活用が可能な空間です。しかし、管理用樋門でコースが遮断されるなど有効な利用ができない状況も少なくありません。
- 沿道空間** 連続したコースを設定するために重要な空間となっていますが、郊外部などでは歩道もなく、安全・快適に歩行が可能な空間ではありません。
- 防災空間** 火山地域は、観光にも魅力的なところが多くあります。そこにコースが設定された場合、砂防施設は防災にとって重要な施設ですが、コースを迂回させてしまったり、来訪者に施設自体が見られるということに対して配慮がされておらず、快適な歩行空間として活用しづらくなっています。



▲河川のオープンスペースとして活用できる築堤天端(旭川のフットパス)



▲ちょっとした工夫でフットパスとして活用できる樋門用水路



▲道路脇を歩く利用者(富良野のフットパス)



▲フットパスルート上にある砂防堰堤(有珠山のフットパス)

## 背景・目的

- 近年、少子高齢化や人口減少などの他、公共事業の減少など社会構造が変化しています。一方、健康や環境への関心も高まっており、道内においても各地で地域住民が主体となり、道路や河川を活用したフットパスの整備が進められています。
- イングランドでは「歩く権利」が認められていますが、日本では公共空間や私有地などの立ち入りが制限されています。このことから、北海道のフットパスの整備には社会資本空間の利用が大きく貢献します。
- フットパスなどの地域の活動に貢献するという視点からみると、社会資本空間の観光への利活用は地域の活性化に寄与します。

## 課題とニーズ

社会資本空間の利用の一例としてフットパスを整備する視点からみた場合、以下のような課題やニーズがわかってきました。

### 課題とニーズ 1

- フットパスなどの社会資本空間を活用する場合の経済的／社会的効果が把握されていないため、行政や地域の理解が不足している。

### 課題とニーズ 2

- 行政の部門毎に対応が異なり、連続的なコース整備が困難となる。特に、ロングトレイルとして整備する場合、行政の部門を超えた対応が不可欠となるなど、社会資本空間の新たな管理手法が重要となる。

### 課題とニーズ 3

- フットパスを整備する為のコース設定基準や道標や標識などの具体的な仕様やデザイン基準が無い。

### 課題とニーズ 4

- 海外のコース整備は可能な限り手を加えず自然ををありのまま見せるが、日本では整備しすぎて魅力を低下させてしまう場合がある。そのため、社会資本空間の利活用を前提とした計画・整備手法が重要となる。



## 地域景観ユニットの取り組み



▲ウヨロ川フットパス※



▲イギリスのフットパス※

地域景観ユニットでは、社会資本の質的向上及び効果的な利活用の観点から、景観などの地域資源を活用したフットパスについて、以下の研究を行っています。

- 国内外の事例の収集と課題の把握
- 北海道における適用性の検討
- 多様な社会資本空間や地域資源を活用した、フットパスに関する技術ガイドラインの検討
- 社会資本の設計や使用材料など、フットパスとして活用される場合の技術仕様の検討

※はエコネットワーク代表小川蔵氏提供